

## 研究成果の紹介

### 国頭マージ土壤における耕耘同時畝立て播種技術によるソバの湿害回避

成果情報 URL [http://www.naro.affrc.go.jp/project/results/laboratory/karc/2015/karc15\\_s09.html](http://www.naro.affrc.go.jp/project/results/laboratory/karc/2015/karc15_s09.html)

#### 【研究の背景】

沖縄本島北部の大宜味村では九州沖縄農研で開発したソバ品種「さちいずみ」の栽培が始まっています。温暖な沖縄では年2回の収穫が可能で、地域の新しい特産作物として大きな期待が寄せられています。しかし、ソバは湿害に弱く、排水性の悪い国頭マージ土壤の圃場では生育不良となりやすく、谷地や低平地では湿害が問題になっています（センターニュース No.54）。

そこで、排水性の悪い圃場でも湿害を軽減できる耕耘同時畝立て播種技術を大宜味村の排水性の悪い圃場に導入し、ソバの生育や収量に及ぼす影響を調べました。

#### 【成果の内容】

耕耘同時畝立て播種技術はアップカットロータリで耕うん、畝立て、播種を同時に行う播種方法です（[http://www.naro.affrc.go.jp/project/results/laboratory/karc/2015/15\\_009.html](http://www.naro.affrc.go.jp/project/results/laboratory/karc/2015/15_009.html)）。1回の作業で約10 cmの畝を作りながら播種するので湿害が少なく、慣行播種と比較し、生育初期の個体の枯死が少なくなりました。その結果、耕耘同時畝立て播種では、収穫時のソバの単位面積当たり個体数や子実収量が慣行播種よりも有意に高くなりました（図1）。これは耕耘同時畝立て播種を行うことで根域の液相（水分の割合）が少なくなり、気相（空気の割合）が多くなって、湿害が軽減したためと考えられました（図2）。

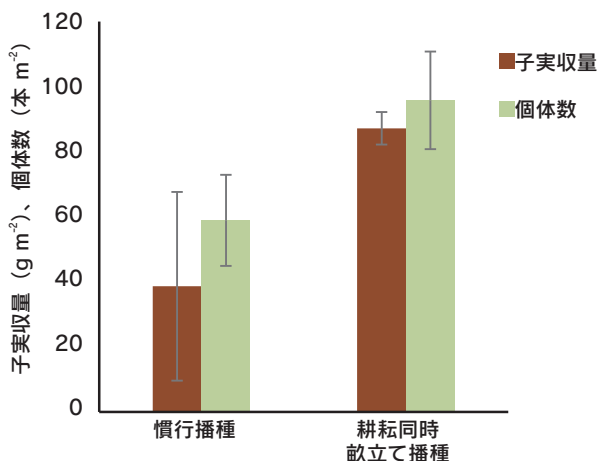


図1 耕耘同時畝立て播種と慣行播種の比較  
耕耘同時畝立て播種の子実収量、個体数が有意に高い

#### 【最後に】

大宜味村は沖縄におけるソバ栽培の主要な産地で、2015年度は春の播種で12ha、秋の播種で11haの作付けがありました。大宜味村内で栽培したソバを使用した「大宜味産和そば」は特産品として村内の店舗で提供され、新たな観光資源として注目されています（写真、[http://www.vill.ogimi.okinawa.jp/specialty\\_products/](http://www.vill.ogimi.okinawa.jp/specialty_products/)）。

大宜味村のソバ生産組合は耕耘同時畝立て播種技術の導入により出芽も早く、生育も良くなったと評価しています。大宜味村ではアップカットロータリの牽引に必要な大型トラクターもあることから本技術は定着しつつあります。今後、沖縄でのソバ生産に本技術がさらに役立つものと期待しています。

【生産環境研究領域 山口 典子】



写真 観光資源の1つになった「大宜味産和そば」  
(写真提供 大宜味村役場 比嘉様)

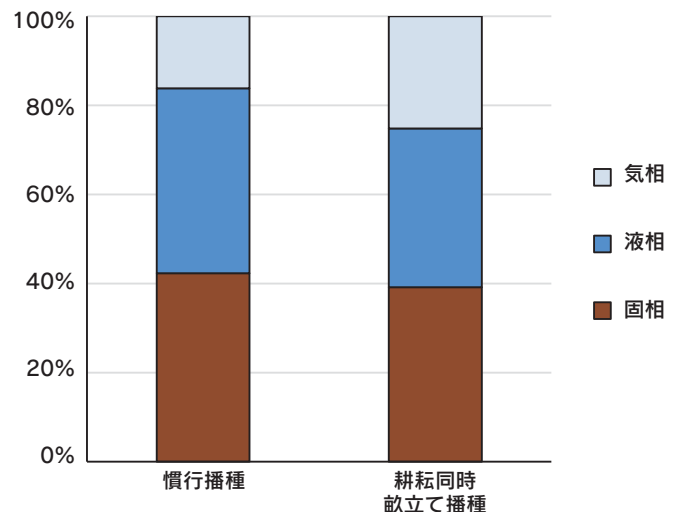


図2 根域の気相、液相、固相の比較  
耕耘同時畝立て播種の液相が減少し、気相が増加している